

## 質疑応答（第一部）

高橋：加藤さん、そして松永さん、永本さん、とても貴重なお話をありがとうございました。大変時間が限られておりましたので、語り尽くせないことがあるかと思います。これから会場のみなさまの質問を受け付けたいと思います。その中でまた、水俣の様子についても語っていただければと思います。

質問者 1（学生）：貴重なお話、ありがとうございました。僕は熊本出身で、熊本から宇都宮大学に来ました。私は小学 5 年生の時に水俣の方に赴き、見学旅行として語り部さんのお話を聞いた経験があります。質問ですが 2012 年の 7 月に水俣病の認定の期間の打ち切りや、水俣病の方々に対する偏見などがあり辛い思いをされたと思います。国や県に対して、補償とかそういうことではなくて、どのような対応が被害者の方々にとって誠意のある対応なのかということが知りたいと思います。それとまた、先ほど冒頭でおっしゃっていた他の大学では大学生が水俣について関わっていくのがやっと始まったということをおっしゃっていました。熊本県内では、水俣病について教育を行っているにもかかわらず、中学生が水俣の学校に対して差別的な発言をして、大ニュースになったということがありました。私は今大学生ですがけれども、学生という立場から水俣病を正しく知るという関わり方というのはどういうものが最適なのかということ、この 2 点について教えていただきたいです。

加藤：まず 1 点目の、患者さん・当事者として、いわゆる金銭補償ではないだろうというところで、どういう償いを求めるかということについてまずはお二人に聞きましょう。

松永：そうですね。2012 年に特措法が打ち切りになるとき、チッソは表向きは救済といいながら、金銭補償をし、自分に対する責任を曖昧にしようとしてしました。自分はその時は反対だったのだけれども、特措法（水俣病被害者救済法）が成立し、やっぱり水俣病の患者と認定されていない人がたくさんいます。やっぱり国もしっかりとこの現状を把握して、もう少し患者に対してきちんと償いをしてほしいと思います。

永本：そうですね。僕の考えではチッソも国も県も、国の人に考えてほしいですね。「きつくて大変ですね。」ではなくて。本当にきつい思いをしなさい、と思います。国の人、ただ頭で考えて目的から言うのではなく「どうですか、みなさん？」と。今腹立たしいのが、まだ終わっていない水俣病の本当に苦しんでいる患者さんに対して、「分社化に協力してくれてありがとうございました。」と言って大きな花束を持ってきたときには、本当は僕たちは分社化をやめてほしいと訴えて国会にも行きました。今度は国も県も自分の責任で

患者さんが苦しんでいるのに。患者たちの話をもっともっと聞いてほしいと思います。以上です。

加藤：水俣病事件ですら 50 年、60 年を迎えようとしています。でも、水俣病の患者の数は何人いるか、ということは明らかになっていません。そして、水俣病患者は誰かという、認定患者がいて、先ほどの特措法（水俣病被害者救済法）による被害者手帖を持っている方がいて、そして、1995 年の水俣病の『政治決着』と言われて『決着』がつかなかった『政治決着』ですけれども、その時に申請した人たちの限定付きの症状を認めても『水俣病』ではなく『メチル水銀中毒』として、被害者手帳と同じように一時金と今後の医療費だけを補償された患者さんがいます。本当のことが何も明らかになっていない現状の中で、ある意味で金銭補償が何も人を幸せにしないということもわかりきったことだと思います。そういう意味で言えば、今、同じほっとはうすに集う人たちの中でも、お二人が、「僕たちはお父さんに感謝する。お父さんがあの時、差別を恐れずに水俣病を申請してくれた。結果的に僕たちは認定を取り付けられた。そのことについては、今いろいろな意味で身体の苦しみというものをあがなっていくためのささやかな補償金であったとしても、全く補償金がもらえない方たちに比べると、少しよかったな。」というところでの感謝の気持ちを語らざるを得ないようなところなんです。ほっとはうすの中でも、同じような症状を持っていながら、被害者手帳の方々＝医療費しか支給されていない人たちもいます。同じ患者の中で既に差別の構造ができあがってしまっているのです。そういう意味では水俣病の汚染地域、そして、その地域で一定期間居住し、お魚を食べたことが事実であり、健康にさまざまな不安を抱えているのであれば、全てを水俣病の患者として認めるところからしか、本当の意味での償いというのはないと思っています。

それから、同じ熊本出身ということでこういう会に来てくださり、ご自分を表明してくださったことはとてもうれしく思います。今も若い人たちの中には、自分の出身地をなかなか語れない、特に水俣の人たちはそうでした。

しかしこの 20 年くらいで随分変わってきました。変わってきてもなお、「水俣病がうつる」、世代をまたいで刷り込まれた差別の中で相手を攻撃する言葉が「お前、水俣なのに」という言葉です。先ほどおっしゃっていたのは、確かサッカーの試合で子ども同士がヒートしてしまったときに、水俣から来たチームに対してそういう言葉が出てしまった。県下、全ての小学校 5 年生は水俣に来て学ぶということが熊本県の教育課題になっています。それでもやはりなお、そういう言葉が続いてしまう。（この問題を解決するために必要なことは）事あるごとにその言葉に対して、言われた側がきちっと言い返せる力をつけるということだと思います。そういう意味ではこの事件、以前の水俣出身と言われてそこで傷つき、故郷水俣に帰ってきて鬱々とした暮らしをしている、かつての水俣の人たちと少し変わってきています。今回の事件は、水俣のその子たちもその言葉を言われたときに即座

にそのことを学校側に伝えました。そこで、水俣市と言わせてしまった学校の当事者の間で、すぐに連携を取りました。結果的に言われた水俣の子どもたちは言われっぱなしにはなりませんでした。きちっとそれを周囲の大人に語った。当事者である水俣の人たちが、きちんとこれからの水俣で、差別の言葉に対して言い返せる、そういう力強さを持っていくことが大切だと思っています。私たちは毎年熊本県内 22 の小・中学校に訪問して授業をさせていただいています。大きなホールではなくて、直接小さな教室の、息遣いが聞こえる関係の中でこうした『水俣病から伝える』ことを繰り返ししていくということです。そのことがきっかけになって、永本さんや松永さんたちをはじめとした水俣病の患者さん達は、ただ「悲惨に生きてきた人たち」ではなく、「悲惨の中に一つの希望をもって生きてきた患者さん」が、少しずつ子どもたちに浸透していっていると思います。相手が生身の人間であることをしっかりとお互いに認識するところからでしか、差別はなくなっていくと思います。以上です。

高橋：ありがとうございました。福島の実状を考えてもその通りであると思います。チッソの賠償で解決するわけではないということです。一番重要なのは、本当に苦しんでいる人たちに心を寄せて、頭を使って考えることではないかということではないかと、非常に有用な言葉であったのではないかと思います。また、差別を受けてきた非常に苦しい状況の中でも、生まれっぱなしではないと、それを伝えていくこと、ただ悲惨に生きてきたわけではないということ、辛い中でも助け合って生きていけるのだと、非常に心強いメッセージをいただいたと思います。ほっとはうすの皆様、誠にありがとうございました。それでは、以上を持ちまして、第一部を終了したいと思います。